

～洛西からの一読～

今回のテーマは「音楽とともに」

みなさんはどんな音楽が好きですか？
みなさんのまわりには、どんな音楽が流れていますか？
今回は、音楽とともに紡がれる物語をご紹介します。



鐘は歌う

アンナ・スメイル／著 山田順子／訳 東京創元社

主人公の少年サイモンは、母親から聞いたある人物の名前と一節のメロディを頼りに、独りロンドンへとやって来ます。街をさまよう中、サイモンはある音に引き寄せられ、白い眼をした不思議な少年ルーシャンと出会います。

読み始めたときは昔のロンドンを舞台にした物語かと思いましたが、読み進めると、まったく別の世界であることがわかってきました。そこは、文字による記録が失われ、音楽によって人々の行動が支配されている世界なのです。〈オーダー〉と呼ばれる支配者たちが、ロンドン中に鳴り響くカリヨン(組み鐘)のメロディにより、街の人々の記憶を奪い、行動を支配しているのです。

その支配に抗いながら隠れ暮らすルーシャンと仲間たち。物語が進むにつれ明らかになる、ルーシャンの過去とサイモンの特殊能力。やがて二人は力を合わせ、〈オーダー〉との戦いに挑んでいきます。

カリヨンだけでなく、文章中に様々な音楽的要素が散りばめられた物語です。



消えたヴァイオリン

スザンヌ・ダンラップ／著 西本かおる／訳 小学館

18世紀のウィーン。少女テレジアは、両親と弟とともに暮らしていました。父親はヴァイオリニスト。テレジアも音楽が好きで、父親からヴァイオリンを教わっていました。

しかし、クリスマスイブの日、オーケストラの演奏会に行ったはずの父親が、冷たく帰ってきます。突然のことに茫然とする中、テレジアは、父親のヴァイオリンがないことに気がつきます。父の死と消えたヴァイオリンの謎。真相を追うテレジアは、ある計画に関わることになり……。

実際に起こった事件をもとにした物語で、当時の社会問題を知ることができます。また、作曲家ハイドンや皇女マリア・エリザベートなど、実在の人物が登場するところも、楽しみなところですよ。

まだ女性が音楽に携わることが良しとされていなかった時代に、楽器を弾くことを愛し、強く生きようとする少女の勇気あふれる物語です。